

若者の身体技法と「マナー」意識

松田恵示 (東京学芸大学)

1, 目的

本報告の目的は、若者の「マナー意識」について、特に身体技法との関係から検討することにある。

「マナー」の衰退、特に若者における公共性意識の低下や、人間関係の希薄化が中教審等にも見られるようにこれまでも繰り返し指摘されている。礼儀、行儀、作法とも訳される「マナー」は、そもそも「ふるまい方」としての、ひとつの身体技法である。エリアスは「マナー」の浸透を文明化の過程における情動抑制の変遷として捉えたが、「マナー」の衰退ということが若者を通して現れるひとつの社会的性向であるとすれば、現代社会は「脱文明化」の過程にある社会なのであろうか。

ところで、「マナー」という言葉は「ルール」や「良心」など類似する用語と区別されることなく使われる場合も多い。おおよそ「規範意識」という意味内容を最大公約数として、これらの言葉は日常的に使用されているように感じられる。「マナー」がそもそもひとつの身体技法であるとするれば、「マナー」という言葉をどのようなものとして意識するのか、つまり「マナー意識」にも、「マナー」の衰退が論じられるのと同様の並行的な変化を見てとることが可能なかもしれない。

また「マナー」という言葉が「西欧化」や明治期における我が国特有の「近代化」の過程で、輸入文化として人々に浸透してきたという側面にも注意を払う必要がある。特に「マナー意識」の変化について考えるとき、「マナー」という言葉や身体技法が権力関係や個人構造の形成過程において、どのような役割を担ってきたのかについて検討しておくことは必要なことになろう。以上のような問題関心を背景に、若者の「マナー意識」と身体技法の現在が持つ、社会

学的インプリケーションを探ってみたい。

2, 方法

若者の「マナー意識」を把握するために、本研究では、自由連想法による調査を行った。「死」のイメージ(上菌, 1997, 2005; 丹下, 2002)や「平和」のイメージ(松尾, 1983)などを対象として行われた自由連想法による調査では、回答者の枠づけられないイメージや意味内容がよく分析されている。

また本研究では、比較分析するために、小学生と大学生を対象として調査を実施している。調査の概要は以下の通りである。

調査 1

- ・対象…東京都 A 市の公立小学校 4 校の 6 年生児童 233 名
- ・内容…刺激後として「マナー」と比較対象とするために「ルール」という 2 つの言葉を選択し、「この言葉から思いつくもの」を 5 個列記してもらうこととした。また回答時間は 5 分に設定した。
- ・時期…2009 年 1 月～2 月

調査 2

- ・対象…東京都内の国立の教員養成系大学に通う 1 年生～4 年生までの大学生 410 名
- ・内容…刺激後として「マナー」と比較対象とするために「ルール」という 2 つの言葉を選択し、「この言葉から思いつくもの」を 3 個列記してもらうこととした。
- ・時期…2009 年 5 月～7 月

3, 結果と考察(一部)

次の表は、調査 1 における、反応後の頻度順上位 15 語までを表したものである。

表 1 反応語の頻度

マナー			ルール		
反応語	頻度	割合(N=233)	反応語	頻度	割合(N=233)
食事	32	13.7	決まり	40	17.2
あいさつ	25	10.7	スポーツ	23	9.9
礼儀	21	9.0	守る	22	9.4
電車	14	6.0	遊び	13	5.6
たばこ	12	5.2	規則	11	4.7
エチケット	10	4.3	ゲーム	10	4.3
きまり	9	3.9	約束	10	4.3
携帯	8	3.4	交通	7	3.0
バス	6	2.6	学校	6	2.6
守ること	6	2.6	廊下	6	2.6
正しい	5	2.1	車	3	1.3
ルール	5	2.1	時間	3	1.3
マナーモード	4	1.7	絶対	3	1.3
約束	4	1.7	持ち物	3	1.3
行儀	3	1.3	やり方	3	1.3

まず「マナー」から連想される言葉としては、「食事(13.7%)」「あいさつ(10.7%)」「礼儀(9.0%)」が上位3語として続いている。それに対して、「ルール」から連想される言葉としては、「決まり(17.2%)」「スポーツ(9.9%)」「守る(9.4%)」となっている。

小学校6年生を対象とした調査では、以上のことから、「マナー」という言葉と「ルール」という言葉がイメージの上でも明確に区別されており、また「マナー」については身体技法としての側面を意味内容として言い当てている。

一方で、「マナー」という言葉が「場面」や「慣習」といったある種の「状況定義」として捉えられる傾向があるのに対して、「ルール」という言葉は「解釈」や「表出」といった「自己との相互作用」を基盤に予想させる反応語が多い。

このようなことから、小学校6年生においては、自身の行為選択に密着したものとして「ルール」という言葉を捉えているのに対して、「マナー」という言葉はイメージとして区別はされているものの、自身の行為選択とは距離のあるものとしてイメージされている傾向を指摘できる。

一般に、ルールは個人にとっては外在す

るものであり、いわば「決められたこと」を守る行為であるのに対して、「マナー」は個人に内在するとともに、他者からの批判を受けうるという意味で同時に外在するものでもあるという両義性を持っている。いわば「決められていないこと」を守る行為が「マナー」であり、この意味では反応語からイメージされる「マナー」意識は、その両義性を踏み越えて、「マナー」の外在化を予想させるものである。しかし、対象者が児童期の子どもであることを考えると、まさに社会化の最中にあるために、こうした傾向を社会的性向として捉えることは難しい。ただ、「マナー」と「ルール」という言葉が、「規範意識」というプラットフォームに見通される共通性よりも、むしろ個別性が見てとれることには一定の注意を払う必要があるとは言えるだろう。

一方で、調査2における大学生の結果からは、「マナー」と「ルール」という用語の関係が、社会化の度合いが異なるにも関わらず、それほど大きな変化がないことが認められる。

シンボリックな行為が衰退する中で、身体技法と「マナー意識」は若者のうちに「脱他者化」しているのである(当日はさらに詳細な報告を行う予定である)。

参考文献

上藺恒太郎(1997)「死」について回答した言葉と連想語. 長崎大学教育学部教育科学研究報告 52. pp.15-24.

上藺恒太郎(2005) 刺激語<死ぬ>から連想する言葉の経過時間による変化. 長崎大学教育学部紀要. 教育科学 69. pp.1-10.

丹下智香子(2002)「死」からの連想語のKJ法による分類—死生観の構造の検討—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 49. pp.157-168.

松尾雅嗣(1983) 連想調査による「平和」の意味分析. 広島大学平和科学研究センター研究報告 8.